

○県内の認知症カフェ、介護施設等にて聞き取り（R6.11月～R7.1月）

認知症に対するイメージ・理解

- ・診断を受けてまだ間がない。認知症をあまり気にしていない。できることはまだまだある。（本人）
- ・認知症と診断されたら「認知症の人」とされるのに違和感を覚える。認知症になっても私はわたし。何も変わらない（本人）
- ・「認知症である」と公言できない人がまだまだ多いと感じる。偏見が社会にあると感じるので公表しにくいのではないかと。（本人）
- ・できないことより、できることに目を向けることが大切と思う。自分はできなかったことを反省。これからはその視点を大事に社会が変わると良い。（家族）
- ・介護が大変。両親ともに認知症を発症したため、在宅では看きれず、二人とも病院に入院させた。（家族）
- ・自分は看護師として認知症ケアや相談に携わってきたので、悪いイメージはない。市民も身近で接して、理解することが大事と思う。（家族）

日常生活の場面

- ・お金を払い忘れて店を出てしまい、同じ店で警察を呼ばれたことが二度もあった。とてもショックだった。（本人）
- ・財布を出すのに手間取るなどした時、前に優しく対応してくれた人がレジ係だと安心して支払いができる。（本人）
- ・公共交通機関で運賃支払いに手間取り、運転手に強く促され辛い思いをした。（本人）
- ・レジで、バッグから財布をなかなか出せず焦っていると、店員が怪訝な表情を浮かべた。後ろに並んでいる人にも申し訳なくて、さらに困ってしまった。どの店も認知症や障がいのある人に配慮したレジ（スローレジなど）を設けるか、オレンジリングをつけた店員を配置して欲しい。（本人：若年性）
- ・自分は認知症であるとヘルプカードやロバ隊長ストラップなどで示して、それで配慮してもらえたらうれしい。（本人：若年性）
- ・認知症の両親を連れて外出したときに、店員や周りの人が見守りをちょっとしてくれるなどの気遣いがあれば助かった。（家族）
- ・流すボタンや位置などがトイレによって違い、戸惑うことがある。ある程度でも統一できないか。（本人）
- ・家族を含めた困りごとについて、理解とさりげない支援が欲しい。（家族）

社会参加の機会

- ・認知症カフェでは同じ立場の人を含めた色々な人と会話をし、お茶を飲んで、いい気晴らしになる。（本人）
- ・当事者の集まりなど、定期的に出かける用事があるだけで違う。生きがいになる。（本人）
- ・自宅から歩いて行ける場所に居場所があると良い。（本人）
- ・仲間とつながることのできる場所があると良い。（家族）
- ・何に困っているのかではなく、何をやりたいのかを本人に聞いてほしい。（支援者）